

3ヶ月児をもつ母親の愛着と哺乳形態に関連する要因の検討

笹野京子¹⁾, 炭谷靖子²⁾

1) 新潟県立看護大学

2) 富山医科薬科大学

要 旨

母親の児への愛着と哺乳形態に関連する要因を明らかにすることを目的として、無記名自記式質問紙による調査を行った。対象は3か月児健診を受診した母親182名であった。内容は属性、主観的疲労感、母親の愛着である。

分析は愛着（児との信頼関係、児との楽しみの因子得点）を従属変数として共分散分析を行った。各要因の主効果および各要因と哺乳形態との交互作用を検討した。

その結果、主効果では、「ねむけだるさ」の訴えの多い群に比べ、訴えの少ない群が有意に、「児との信頼関係」の因子得点が高かった。また、人工栄養の群に比べ母乳栄養の群が「児との楽しみ」の因子得点有意に高かった。

交互作用では、就業中の群、「ねむけだるさ」の訴えの少ない群、「注意集中の困難」の訴えの多い群で母乳哺育をしている母親の「児との信頼関係」の因子得点が高かった。

また、「育児代理者」のない群で母乳哺育をしている母親の「児との楽しみ」の因子得点が高かった。

上記より、母親の愛着を高め、より良い母子関係を形成するために、母親の属性を考慮した母乳哺育援助の必要性が示唆された。

キーワード

愛着, 母乳哺育, 産後3ヶ月, 疲労, 働く母親

1 はじめに

母親の子どもへの愛着は、妊娠期から子供への絆を形成 (binding-in)¹⁾ し、出産後から育児期に子どもと触れ合いや育児を通して形成する (bonding)²⁾ といわれている。また、子どもの愛着は、子どもと母親との情愛的なつながりをいい³⁾ 母児相互作用を通して形成される。この愛着は、Eriksonの発達段階⁴⁾ の最初の重要な段階である子どもが人への基本的信頼感を持つことにつながり、その後の児の人格形成や心の安定の基

盤となる。子どもの健全な愛着形成には、母親との関わりを通して形成される。それを決定付けるのは、母親の愛着であり、それ自身は子どもに対する影響以上に、母親自身の親となるあり方を支えるともいえ母児にとって重要なものである。

一方、母乳が新生児や乳児の発達に栄養学的・免疫学的に優れていることは、医学的見地⁵⁾ から明らかである。加えて、授乳をする経験が母親の愛着を発達させる契機となっている⁶⁾ ともいわれている。しかし、その後の愛着と母乳哺育との関連については、有効なエビデンスが得られてい

3ヶ月児をもつ母親の愛着と哺乳形態とに関連する要因

ないのが現状である。

そこで、本研究では、母乳栄養を行っている率の高い3ヶ月児を持つ母親の愛着と哺乳形態に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

1) 調査対象者の抽出方法および調査方法

(1) 対象

対象は、A市の3ヶ月健診に来所した母親203名に研究の趣旨を口頭と書面をもって説明し、調査の協力が同意が得られた192名の母親とした。

(2) 調査期間

平成12年4月～8月

(3) 調査方法

無記名による自記式質問紙を健診会場で調査者が配布し、その健診会場内での留置法により回収を行った。

2. 調査内容

1) 対象の属性

母親の年齢、母親の就業状況、育児代理者、子供の性別、子供の数、授乳形態について調査を行った。

2) 母親の愛着

大日向が1978年に175名の母親を対象にした調査を基に作成した愛着尺度18項目⁷⁾を基に3ヶ月の児を持つ母親に適さない項目6項目を除外して用いた。12項目の質問項目に「そのとおりである」「どちらかというところである」「どちらかというところと違う」「違う」の4段階評価として回答を得た。

3) 母親の疲労自覚症状

母親の疲労感として、主観的疲労感が測定できる日本産業衛生疲労委員による疲労自覚症状調査表30項目⁸⁾(以下、疲労自覚症状)を用いた。疲労自覚症状の3領域は1967年日本産業衛生学会・産業疲労研究会によって選定されたものである。因子分析により10項目ずつの3群に分けられ、第1群「ねむけだるさ」、第2群「注意集中の困難」、第3群「局在した身体違和感」と名づけられてい

る。回答方法は、あり、なしの何れかを選ぶ形式で得た。得点はなしを0点、あるを1点として、第1～3群それぞれの得点を算出した。

3. 分析方法

分析には、SPSS Ver10.05を用いた。分析にあたっては、属性の「年齢」は30歳未満と30歳以上、「就業状況」は現在就業中と休業または主婦、「育児代理者」はありとなし、「子どもの数」は1人と2人以上、「子どもの性別」は男・女の2群に分類し用いた。母親の「愛着」に関しては、因子分析により構造分析を行い、各事例の因子得点を算出し、分析に用いた。「疲労自覚症状」については、訴えの少ない群と多い群に分類するためにそれぞれの中央値を算出し、訴えの少ない群(ねむけだるさ：0～2点、注意集中の困難：0～1点、局在した身体違和感：0～1点)、訴えの多い群(ねむけだるさ：3点以上、注意集中の困難：2点以上、局在した身体違和感：2点以上)に分け分析に用いた。

まず、母親の愛着とその背景の特徴を明らかにした。つぎに、「愛着」を従属変数に属性「年齢」、「就業状況」、「子どもの数」、「子どもの性別」、「哺乳形態」「疲労自覚症状」を独立変数とし、多元配置分散分析をおこない、母親の愛着に対する主効果と交互作用の分析をおこなった。

4. 倫理的配慮

質問紙調査を行うにあたって、研究目的、研究協力は任意であること、途中でも中止でき、断っても不利益を被らないこと、匿名性の保持および論文の公表を明記した依頼書を手渡して、口頭での説明も同時に行った。口頭で承諾の得られた対象者に調査への協力を依頼した。

III. 結果

質問紙は202名に配布し、198名(98.0%)から回答を得た。その内、必要項目全てに回答のあったもの182名(90.1%)を有効回答とした。

1. 対象の特徴

対象の年齢は、平均29.3±3.8歳(19-38歳)、

であった。母親の3ヶ月時点での就業の有無では、就業中の人25名(13.7%)、就業していない人157名(86.3%)、育児代理者については、夫と答えた人62名(34.1%)、夫以外と答えた人99名(54.4%)、誰もいないと答えた人21名(11.5%)であった。子供の数では、一人が83名(45.6%)、二人以上が99名(54.4%)であった。児の性別では、男88名(48.4%)、女94名(51.6%)であった。哺乳形態では、母乳栄養98名(53.4%)、混合・人工栄養84名(17.0%)であった(表1)。

表1. 対象の属性

		n=182	
		範囲	平均±標準偏差
		19~38	29.2±3.8歳
		人	%
就業	就業中	25	13.7
	育児休業中	36	19.8
	専業主婦	121	66.5
育児代理者	夫	62	34.1
	自分の親	50	27.5
	夫の親	47	25.8
	その他	2	1.1
子どもの数	育児代理なし	21	11.5
	1人	83	45.6
	2人	99	54.4
	3人	19	10.4
	4人	3	1.6
	5人	1	0.5
子どもの性別	男	88	48.4
	女	94	51.6
哺乳形態	殆ど母乳栄養	98	53.4
	混合栄養	31	17.0
	殆ど人工栄養	53	29.1

2. 疲労自覚症状

母親一人当たりの疲労自覚症状訴えは平均6.0±4.5点、範囲1-24点、であった。3領域(症状)別では、「ねむけだるさ」は平均2.6±3.8点、範囲0-10点であり、「注意集中の困難」は平均1.6±2.0点、範囲1-10点、「局在した身体違和感」は平均1.9±1.4点、範囲0-6点であった(表2)。

表2. 疲労自覚症状領域別・全体

	範囲	平均	標準偏差
I領域: ねむけとだるさ	0~10	2.6	(3.8)
II領域: 注意集中の困難	0~10	1.6	(2.0)
III領域: 局在した身体違和感	0~6	1.9	(1.4)
疲労自覚症状全体	1~24	6.0	(4.5)

具体的な項目のうち訴えが多かった項目は、「肩がこる」114人(62.6%)、ついで「ねむい」110人(60.4%)、「腰が痛い」90人(49.5%)、「目がつかれる」72人(39.6%)、「いらいらする」61人(33.5%)、「ちょっとしたことが思い出せなくなる」57人(31.3%)であった(表3)。

表3. 疲労自覚項目別訴え数

項目	n=182	
	人	%
ねむけ・だるさ		
ねむい	110	60.4
目がつかれる	72	39.6
あくびがでる	63	34.6
横になりたい	48	26.4
足がだるい	47	25.8
全身がだるい	45	24.7
頭がぼんやりする	29	15.9
頭がおもい	26	14.3
足元がたよりない	14	7.7
動作がぎこちない	10	5.5
注意集中の困難		
いらいらする	61	33.5
ちょっとしたことが思い出せなくなる	57	31.3
物事が気にかかる	33	18.1
物事に熱心になれない	25	13.7
根気がなくなる	23	12.6
考えがまとまらない	22	12.1
することに間違いが多くなる	22	12.1
気がちる	19	10.4
きちんとしてられない	18	9.9
話をするのがいやになる	4	2.2
身体の違和感		
肩がこる	114	62.6
腰が痛い	90	49.5
口がかわく	42	23.1
めまいがする	30	16.5
頭がいたい	27	14.8
まぶたや筋がピクピクする	16	8.8
手足がふるえる	6	3.3
声がかすれる	4	2.2
気分がわるい	4	2.2
いきが苦しい	3	1.6

3. 愛着の因子分析

愛着については12項目についての因子分析(主因子法:バリマックス回転)を行った。因子分析の結果、固有値1以上の2因子を抽出し、それぞれの項目の特徴から各因子を命名した。第1因子は児との信頼関係を表す8項目の特徴から「児との信頼関係」と命名し、第2因子は児との楽しみを表す4項目の特徴から「児との楽しみ」とした。各因子の寄与率は31.8%、22.3%であり、累積寄

3ヶ月児をもつ母親の愛着と哺乳形態とに関連する要因

与率は54.1%であった。各々の信頼性係数は、0.91, 0.78, 全体項目の信頼性係数は、0.91であった(表4)。

4. 愛着と背景

母親の愛着(児との信頼関係)では就業中の母親の方が低い傾向(p<0.1)があり、育児代理者

表 4. 3 か月児に対する母親の愛着の因子分析結果

項目	第1因子	第2因子
第1因子：児との信頼関係		
11 いつでも子どもを信じてあげたい	0.80	0.23
10 子どもの態度や様子に心を配ってあげたい	0.73	0.37
12 いつでも子どもは私を信じてほしい	0.73	0.29
6 子どもの身の回りのことに関心をもっていたい	0.66	0.35
7 子どもの考えや気持ちを私は理解してあげたい	0.62	0.41
4 子どもがそばにいと安心する	0.57	0.41
5 私がそばにいと安心すると子どもに思われたい	0.57	0.57
3 子どもが元気かどうか、私は気にかけてあげたい	0.56	0.28
第2因子：児との楽しみ		
9 私と一緒に外出したと子どもに思われたい	0.30	0.78
10 子どもの態度や様子に心を配ってあげたい	0.22	0.64
2 私と一緒にいと楽しいと子どもに思われたい	0.35	0.58
1 子どもと一緒にいと楽しい	0.23	0.45
寄与率	31.84	22.30
累積寄与率	31.84	54.14

因子抽出法：主因子法、バリマックス回転

表 5. 母親の愛着と属性

n=182

	人	児との信頼関係			児との楽しみ		
		平均	標準偏差		平均	標準偏差	
年齢							
30歳未満	100	0.057	0.797	ns	-0.007	0.898	ns
30歳以上	82	-0.069	1.029		0.009	0.819	
哺乳形態							
混合・人工栄養	53	-0.079	0.990	ns	0.000	0.920	ns
母乳栄養	129	0.068	0.831		0.000	0.812	
就業状況							
就業中	25	-0.396	1.215	†	-0.165	0.893	ns
就業していない	157	0.063	0.837		0.026	0.856	
育児代理者の有無							
あり	161	-0.036	0.943	*	-0.006	0.856	ns
なし	21	0.275	0.514		0.049	0.918	
子どもの数							
1人	83	0.114	0.725	ns	0.230	0.736	***
2人以上	99	-0.096	1.031		-0.193	0.913	
子どもの性別							
男	88	-0.071	0.986	ns	0.053	0.832	ns
女	94	0.067	0.828		-0.050	0.889	
疲労自覚症状							
ねむけとだるさ							
訴え少ない群	101	0.095	0.851	ns	0.165	0.788	***
訴え多い群	81	-0.119	0.967		-0.205	0.908	
注意集中の困難							
訴え少ない群	106	0.040	0.885	ns	0.200	0.712	***
訴え多い群	76	-0.056	0.943		-0.279	0.971	
局在した身体違和感							
訴え少ない群	81	-0.033	0.936	ns	0.085	0.802	ns
訴え多い群	101	0.026	0.889		-0.068	0.903	

ns: 有意差なし, †: p<0.1, * p<0.05, ***: p<0.001 (t検定)

の有無では、ありの方が低く ($p < 0.05$) 有意差があった。「児との楽しみ」では、子どもの数で一人の母親が高く ($p < 0.001$)、疲労自覚症状では、ねむけだるさと注意集中の困難とも訴えの少ない群の母親が高かった ($p < 0.001$)。しかし、愛着と哺乳形態については関連がみられなかった(表5)。

そのため、愛着の2因子のいずれかに関連があった項目(就業状況、育児代理者、子どもの数、疲労自覚症状(ねむけだるさ、注意集中))と年齢を調整変数として、愛着と哺乳形態との関係を知るために7元配置分散分析を行った。

5. 愛着と関連する要因

1) 母親の愛着に対する主効果

母親の愛着の2因子(児との信頼関係、児との楽しみ)をそれぞれ従属変数とした分散分析を行った。疲労自覚症状のねむけだるさで訴えの多い母親に比べ、訴えの少ない母親に愛着(児との信頼関係)が有意に高かった ($B = 0.574, p < 0.01$)。注意集中の困難では訴えの多い母親に比べ少ない母親は「児との信頼関係」が有意に低い傾向があった ($B = -0.386, p < 0.1$)。哺乳形態で母乳栄養を行っている人に比べ混合・人工栄養を行っている人は「児との楽しみ」が有意に低かった ($B = -0.996, p < 0.05$)。また、疲労自覚症状のねむけだるさで訴えの多い母親に比べ少ない母親

表6. 母親の愛着を従属変数とした分散分析(主効果・交互作用)

	母親の愛着			
	児との信頼関係		児との楽しみ	
主効果				
年齢				
30歳未満/30歳以上	-0.015	n.s.	-0.253	n.s.
就業状況				
就業中/就業していない	0.414	n.s.	0.038	n.s.
育児代理者の有無				
あり/なし	-0.321	n.s.	-0.494	n.s.
子どもの数				
1人/2人以上	0.110	n.s.	0.259	n.s.
哺乳形態				
混合・人工栄養/母乳栄養	-0.140	n.s.	-0.996	*
疲労自覚症状				
ねむけとだるさ				
訴え少ない群/訴え多い群	0.574	**	0.341	†
注意集中の困難				
訴え少ない群/訴え多い群	-0.376	†	0.220	n.s.
交互作用				
年齢×哺乳形態	0.148	n.s.	0.135	n.s.
就業状況×哺乳形態	-0.992	*	-0.221	n.s.
育児代理人×哺乳形態	0.029	n.s.	0.874	*
子どもの数×哺乳形態	0.022	n.s.	0.361	n.s.
疲労自覚症状				
ねむけとだるさ×哺乳形態	-0.673	*	-0.168	n.s.
注意集中の困難×哺乳形態	0.650	*	0.202	n.s.

注1) n.s.: 有意差なし, †: $p < 0.1$, *: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$

注2) 分散分析の従属変数に愛着の2因子毎に、独立変数に年齢(2群)、就業状況(2群)、育児代理者の有無、子どもの数(1人、2人以上)、哺乳形態(人工ミルク・混合、母乳)、疲労(2領域)を投入した主効果、および年齢、就業状況、育児代理者の有無、子どもの数、疲労と哺乳形態との交互作用項を投入したパラメータ推定値を示した。

は「児との楽しみ」が有意に高い傾向があった (B=0.841, $p<0.1$) (表6).

2) 母親の愛着に対する交互作用

1) の多元配置分散分析の独立変数と哺乳形態との交互作用の分析を行った。その結果、「児との信頼関係」で有意差があったのは「就業状況×哺乳形態」(B=-0.992, $p<0.05$), 疲労自覚症状の「ねむけだるさ×哺乳形態」(B=-0.673, $p<0.05$), 「注意集中の困難×哺乳形態」(B=0.650, $p<0.05$) であった。「児との楽しみ」では「育児代理者×哺乳形態」(B=0.874, $p<0.05$) に有意差があった (表6).

交互作用で有意差があった項目が愛着と哺乳形態にどのような関連があるのかを明らかにするために、属性別に作図した。

(1) 就業状況と哺乳形態

「就業していない」母親は哺乳形態によって愛着「児との信頼関係」の得点に違いはないが、「就業中」の母親では母乳哺育を継続している母親の方が愛着「児との信頼関係」の因子得点が高くなっていた (図1).

(2) 疲労自覚症状のねむけだるさと哺乳形態

疲労の自覚症状の「ねむけだるさ」の訴えの多

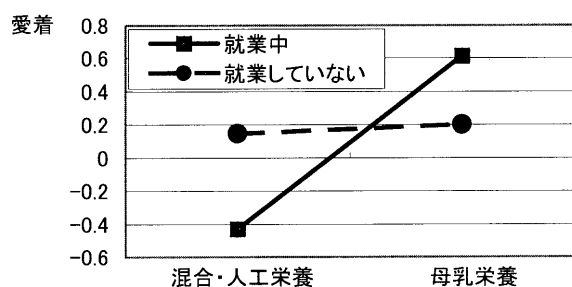


図1. 母親の愛着「児との信頼関係」に対する就業状況と哺乳形態との交互作用

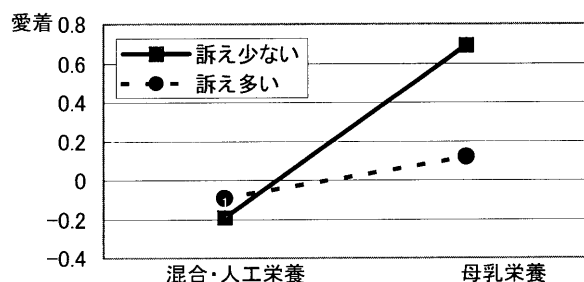


図2. 母親の愛着(児との信頼関係)に対する疲労自覚症状(ねむけとだるさ)と哺乳形態との交互作用

い母親は哺乳形態により愛着(児との信頼関係)の得点に違いはないが、訴えの少ない母親では母乳哺育を継続している母親の方が愛着(児との信頼関係)の因子得点が高くなっていた (図2).

(3) 疲労自覚症状の注意集中の困難と哺乳形態

疲労自覚症状の「注意集中の困難」の訴えの少ない母親は哺乳形態により違いはないが、訴えの多い母親では、母乳哺育を継続している母親の方が愛着(児との信頼関係)の因子得点が高くなっていた (図3).

(4) 育児代理者と哺乳形態

育児代理者がある母親は哺乳形態により違いはないが、育児代理がない母親では母乳哺育を継続している母親の方が愛着(児との楽しみ)の因子得点が高くなっていた (図4).

IV. 考察

今回、母親の愛着が形成される乳児初期である3ヶ月児をもつ母親の愛着と哺乳形態にどのような背景が影響をもたらしているのかを明らかにするために分析を行った。

分析にあたり、本研究で用いた3か月時点の母

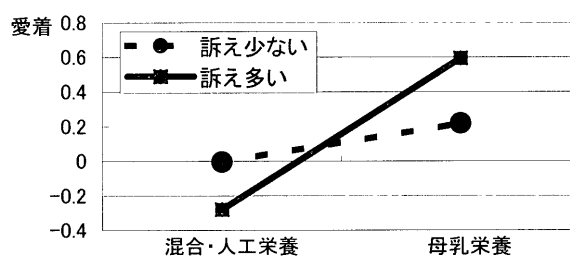


図3. 母親の愛着(児との信頼関係)に対する疲労自覚症状(注意集中の困難)と哺乳形態との交互作用

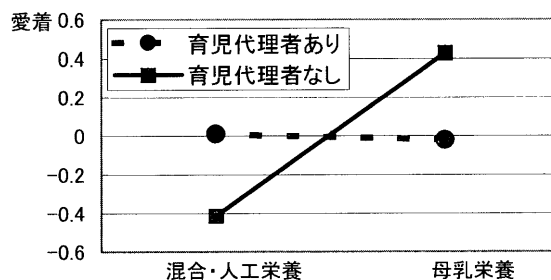


図4. 母親の愛着(児との楽しみ)に対する育児代理者と哺乳形態との交互作用

乳栄養率53.4%は、全国調査の39.4%と比較すると有意差 ($p<0.05$) がみられるが、人工栄養の比率29.1%は、全国調査⁹⁾の30.2%と有意差が見られない。その理由として質問紙において「殆ど母乳」という問いをした結果、混合栄養を行っている母親でより母乳栄養の比率が多い母親が母乳栄養と答えた結果と考えられる。そのため、このことを加味した上でこの研究結果を理解する必要がある。

1. 母親の愛着の主効果に関する考察

1) 児との信頼関係と疲労自覚症状（ねむけだるさ）

乳幼児をもつ母親は、育児や授乳のために夜間の睡眠の中断を余儀なくされる。堀内¹⁰⁾が行った産褥1~2ヶ月の褥婦の睡眠状況調査では90%の母親が睡眠不足やねむけが残ると報告している。本研究で対象とした母親は産褥3~4か月であるため、産褥1~2ヶ月に比して徐々に授乳間隔の延長や哺乳時間の短縮¹¹⁾や分娩からの体力回復により疲労感は漸減する¹²⁻¹³⁾ものの夜間の睡眠が中断されることによるねむけだるさがあるものと考えられる。

Mercer¹⁴⁾は産褥期の疲労原因の第一に睡眠不足を挙げ、睡眠不足による適応能力の低下が起ると述べている。

また、Maslowの基本的欲求で照らしてみると、第2段階の生理的欲求である睡眠が満たされないと感じる母親は愛着（児との信頼関係）を高められず、上位レベルの「所属と愛の欲求」へは向かえないとも考えられる。

本研究においても、疲労自覚症状（ねむけだるさ）の訴えが多い母親に比べ、少ない母親に愛着が高くなる結果が得られており、産後3か月時点で育児生活の適応状況にある母親に順調な愛着が形成されるものと推測される。しかし、反対に、ねむけだるさを多く訴える母親は愛着が低く不適応状況にあると考えられる。今後、母親の愛着を高めるために睡眠が確保できるような支援体制を考慮する必要があると考えられる。

2) 児との信頼関係と疲労自覚症状（注意集中の困難）

小木¹⁵⁾は「注意集中の困難」は、課題達成や情報処理の不調であり、これの極端な場合を「へばり」であると述べている。また、疲労の3領域の特徴から1・3領域が身体的症状であるのに対し、2領域の（注意集中の困難）では「精神的症状」が殆ど含まれており、疲労感の中で重要な位置を示している⁸⁾と述べられている。本研究の結果では、疲労自覚症状（注意集中の困難）の訴えの多い母親が訴えの少ない母親に比べ愛着（児との信頼関係）が高い結果であった。これは、訴えが多い母親は母親役割という課題達成のため邁進するがゆえに不調となり精神的症状が出現しがちであるが、児との信頼関係を形成する愛着が強化すると推測される。

3) 児との楽しみと哺乳形態

母乳哺育は栄養学的・免疫学的に良いだけでなく、母子双方の心理的安定や母子間の愛着にも貢献するといわれている。前田¹⁶⁾も母乳群に育児は楽しいと答えるものが多いことから母乳哺育がよりよい母子相互関係が生じることを示唆している。本研究においても、母乳を行っている母親が児との楽しみを感じ愛着を強めるものと考えられる。

4) 児との楽しみと疲労自覚症状（ねむけだるさ）

児との信頼関係と同様に、ねむけだるさの身体症状がある状況では、育児を楽しめるような愛着を強化することは困難になるものと考えられる。

2. 母親の愛着の交互作用に関する考察

母親の愛着が母親の属性と哺乳形態と関連があるかを検討した結果を考察する。

1) 母親の愛着「児との信頼関係」に対する就業状況と哺乳形態との交互作用

母親の愛着（児との信頼関係）に対して、哺乳形態と就業状況のそれぞれの主効果は有意差がなかったものの、哺乳形態と就業状況との交互作用で有意差があった。就業中の母親で混合・人工栄養を行っている母親に愛着が低く、母乳栄養を行っている母親に愛着が高かったことは、愛着の形成状況により、哺乳形態が選択される可能性が示唆された。

乳幼児をもつ母親に対する育児時間を与えるな

ど働く母親の環境として育児時間など法制度は整いつつある。しかし、実際には、授乳や搾乳をする時間が取れないこと、場所がないこと、設備がない¹⁷⁾ ことなどがあげられており、特に場所については75.8%の母親がないことを報告¹⁸⁾ している。また、就業開始後の哺乳形態¹⁹⁾ では夜間は母乳40%の母親が母乳栄養としているが、日中は10%のみとなっているなど、母乳を継続したくても職場環境や周囲の協力が得られなければ母乳栄養を継続することは難しいものと考えられる。このような社会環境の中で就業中の母親が母乳栄養を継続することは、母親の環境調整能力や時間配分など個人の力量に依存するところが大きく、その動機づけに児への愛着が強くなる場合に継続が可能となると考えられる。そのため、産褥早期から就業せざるを得ない母親に対して、児との愛着がよりよく形成されるため、職場環境や家族の協力が得られるような体制作りが必要となると考えられる。

一方、就業していない人については哺乳形態に違いがなかった。

2) 母親の愛着（児との信頼関係）に対する疲労自覚症状（ねむけだるさ）と哺乳形態との交互作用

母親の愛着（児との信頼関係）に対して、ねむけだるさと哺乳形態との交互作用で有意差があった。母乳栄養を行っている母親で疲労自覚症状のねむけだるさの訴えが少ない母親に愛着が高く、訴えの多い母親に愛着が低かったことは、疲労が愛着形成の阻害要因となる可能性が示唆された。このことから母乳栄養を行っている母親の愛着を高めるためには、睡眠への生理的な欲求を満たす援助が重要であると考えられる。そのためには、授乳中の母親に産褥早期から授乳中心の生活に適応でき睡眠を日中に補うことができるような指導や、周囲の人が授乳婦の日中の仮眠を認めるなどの啓蒙をおこなっていくことが重要となる。

3) 母親の愛着（児との信頼関係）に対する疲労自覚症状（注意集中の困難）と哺乳形態との交互作用

母親の愛着（児との信頼関係）に対して、注意集中の困難と哺乳形態との交互作用で有意差があっ

た。母乳栄養を行っている母親で疲労自覚症状の注意集中の訴えが少ない母親に愛着が高く、訴えの多い母親に愛着が低かったことは、疲労のねむけだるさ同様に愛着形成の阻害要因となると考えられる。また、混合・人工栄養を行っている母親で疲労自覚症状の注意集中の困難の訴えが多い母親は愛着が低い結果であった。竹谷⁸⁾ は、モラルの低い母親ほど自覚症状の訴え数が多いという逆相関関係があると述べており、この結果は、育児そのものへの関心が低いか、他のなんらかの要因が予測される。そのため、混合・人工栄養を行っている母親の訴えが多くなる原因をつきとめ介入する援助が重要となると考える。

4) 母親の愛着（児との楽しみ）に対する育児代理者と哺乳形態との交互作用

母親の愛着（児との楽しみ）に対して、育児代理者と哺乳形態との交互作用で有意差があった。母乳栄養を行っている母親で育児代理者がいない場合に愛着が高く、同じく育児代理者がいない場合で混合・人工栄養を行っている母親に愛着が低かったことは、育児代理者のない母親では哺乳形態により愛着に違いがあることを示唆している。

この母親の愛着（児との楽しみ）は、育児代理者がいない場合、母乳栄養を行っている母親では母子の緊密化が進み愛着が形成され育児を楽しめるのに対して、混合・人工栄養を行っている母親では、愛着が形成されにくいと考えられる。

そのため、ソーシャルサポートがない母親には、社会資源を活用するなどの支援が受けられるような指導・援助を行うことが重要であると考えられる。

以上から、3ヶ月の時点では、母の児に対する愛着は形成段階であるものの、母乳栄養は愛着と深く関与していた。その理由として母乳を行うことは児の反応を読み取る感受性が高まると同時に愛着もはぐくまれるものと考えられる。今後、継続して調査を行い、経時的に母親の愛着と哺乳形態とに関連する要因を明らかにしていきたい。

また、母親の愛着は、強さではなく安定性にあると考えられている³⁾。今回、用いた尺度では、因子得点を用いたためその安定性についての言及はできないと考えられる。今後、安定性も含めた

検討を行っていく必要がある。

V. 結 語

本研究では、3ヶ月児をもつ母親の愛着と哺乳形態とに関連する要因を明らかにするために多元配置分散分析の主効果と交互作用で検討を行った。

1) 主効果では、「ねむけだるさ」の訴えの多い群に比べ、訴えの少ない群が有意に、「児との信頼関係」が高かった。また、人工栄養の群に比べ母乳栄養の群が「児との楽しみ」の因子得点が有意に高かった。

2) 交互作用では、就業中の群、「ねむけだるさ」の訴えの少ない群、「注意集中の困難」の訴えの多い群で母乳哺育をしている母親の「児との信頼関係」の因子得点が高かった。

謝 辞

本研究の調査にあたりご協力を頂きました褥婦の皆様、ならびに分析に当たってご助言を頂きました地域看護学講座成瀬優知先生に心から感謝いたします。

引用文献

- 1) Rubin R, 新道幸恵, 後藤桂子訳: ルヴァ・ルービン・母性論・母親の主観的体験. 45-82, 医学書院, 東京. 1997.
- 2) Klaus M, Kennell, J, Klaus, P: Bonding building the Foundations of secure attachment and independence, 竹内徹 訳: 親と子のきずなはどうつくられるか. 18-19, 医学書院, 東京都, 2001.
- 3) Bowlby, J. (1988): 仁木武監訳: ポウルビィ, 母と子のアタッチメント, 心の安全基地. 152-164, 医歯薬出版会, 東京, 1996.
- 4) Erikson, E H, (二科弥生訳): 幼児期と社会1. みすず書房.
- 5) 久具宏司: 母乳哺育の意義. 産婦人科治療, 85, 377-381, 2002.
- 6) 大日向昌美: 母性の発達と妊娠に対する心理的な構えとの関連性について. 周産期医学, 11: 147-153, 1981.
- 7) 大日向雅美: 母性の研究 その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証. 東京, 川島書店, 1988.
- 8) 吉竹 博: 改定 産業疲労 - 自覚症状からのアプローチ. 労働科学研究所出版部, 東京, 1993.
- 9) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課監修: 母子保健の主なる統計, 母子保健事業団, 126, 東京, 2003.
- 10) 堀内成子, 近藤潤子, 小山真理子他: 産褥早期における睡眠の主観的評価. 聖路加看護大学紀要, 16: 49-59, 1990.
- 11) 小林美智子: 母乳哺育児の自律哺乳における哺乳時間, 哺乳量, 哺乳間隔の月齢における変化について. 小児保健研究, 56: 638-643, 1997.
- 12) 外間登美子, 谷口希代子, 竹中静廣: 母親の疲労に関する調査成績—産後1か月から3か月までのアンケート調査より—. 母性衛生, 38: 179-181, 1997.
- 13) 大竹佳子, 古賀香織, 小塚聡子, 他: 産褥の疲労について—産褥1週間, 1ヶ月, 2ヶ月目の調査を通して—. 愛知母性衛生学会誌, 16, 17-24, 1998.
- 14) Mercer, R T: First-time motherhood, Springer Publishing Co.Inc., New York, 1986.
- 15) 小木和孝: 夜勤者の訴えと健康障害対策, 労働の科学, 25: 14-21, 1970.
- 16) 前田 清, 池沢敏子, 佐野明美, 母乳哺育と母親の心理的因子との関連について, 小児保健研究, 46: 58-62, 1987.
- 17) 福士真都美, 竹澤厚子, 伊藤かよ子, 他: 4か月健診の母親を対象にした働く情勢の母乳哺育実態調査, 健生病医報, 24: 71-74, 1998.
- 18) 安藤優子, 滝本律子, 仲久木美, 他: 働く女性の母乳育児実態 今後の保健指導を考える, 茨城県母性衛生学会誌, 22: 41-45, 2002.
- 19) 岡野禎治, 野村純一, 越川法子他: Maternity blue と産後うつ病の比較文化的研究, 精神医

3ヶ月児をもつ母親の愛着と哺乳形態とに関連する要因

学, 33 : 1051-1058, 1991.

An assessment of factors related to maternal attachment and nursing styles of mothers with three-month-old infants

Kyoko SASANO¹⁾, Yasuko SUMITANI²⁾

1) Niigata College of Nursing

2) Department of Community and Gerontological Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University School of Nursing

Abstract

In order to clarify the relationship between the maternal attachment and nursing styles, a questionnaire survey focusing on mothers with three-month-old infants was done. Anonymous self-assessment survey was conducted with 182 new mothers at the three-month check-up. "Age," "number of children," "employment," "fatigue" and "maternal attachment" were queried. Analysis of co-variance was used using attachment(factor scores of "trusting relationship" and "pleasurable interaction") as a dependent variable, to specify the primary effects by factor, and the interactive effects between factors and the mother's personality traits. The result was as the following. 1) Factor analysis revealed that categorized maternal attachment consisted of a "trusting relationship" and "pleasurable interaction." 2) "trusting relationship," was significantly associated with "employment" and "child-care substitute, and also "pleasurable interaction" was significantly associated with "number of children", "drowsiness/weariness" and "difficulty concentrating", respectively. 3) Using attachment as a dependent variable, "drowsiness/weariness" had significantly main effect on the "trusting relationship" and "nursing styles" had main effect on "pleasurable interaction." 4) Significant interaction effect was found "employment x nursing styles", "drowsiness/weariness x nursing styles", and "difficulty concentrating x nursing styles," in the "trusting relationship" and also "child-care substitute x nursing styles" in "pleasurable interaction" on maternal attachment.

In conclusion, maternal attachment varied based on fatigue, social background and nursing styles. To develop maternal attachment and improve the relationship mothers and infants through promoting breast-feeding, supports and assistance should be tailored to the mother's individual traits

Key words

attachment, raising children by breastfeeding, three months after childbirth, fatigue, working mothers